

連合 東日本震災救援ボランティア第10陣（2011.6.11～6.19）報告

（ベースキャンプ：会津）

愛媛県労福協 福岡 達弥

6月11日（土）11時半、連合本部へ集合し、オリエンテーションの後、福島県（会津ベースキャンプ）のある耶麻郡へ向けて出発。四国ブロックの一員として5班（徳島：斉藤さん、高知：育久さん）に参加させていただきました。行き帰りの移動に2日、実質ボランティア活動に従事したのは6月12日（日）から6月18日（土）の7日間になります。会津ベースキャンプは、1班～6班で、郡山と会津若松に分かれて活動を行いました。5班は基本的に郡山での活動に従事しました。

1日の流れとしては、7時半に郡山にむけて出発し8時半着。作業は、NPO法人ハートネット福島が行っている避難者の生活支援活動（炊き出し準備等）の手伝いを中心に行うとのことでしたが、炊き出し支援の団体も多く福島に入っているようで、基本的に炊き出し準備に関する作業は、午前中いっぱい終わる様子でした。午後を中心に空いた時間については、連合本部にも了解をいただき、郡山にあるビックパレット福島内のボランティアセンター（社協）に個々人で登録をし、そこでの活動に従事しました。



炊き出し・仮設への配給用の米小分け



ハートネット福島から現地の状況説明



県内各地に点在する避難所で炊き出し



ビックパレットふくしま



ボランティアセンターにて個人登録

避難先（ビックパレットふくしま）の状況

この「ビックパレットふくしま」は、愛媛でいうところの「アイテムえひめ」の様な大型箱モノ施設で、主に原発の影響で富岡町・川内村からの方々が避難して来られているとのことでした。私たちが滞在した6月中旬段階では、約 1000 名の方がいらっしゃり、生活環境としては大ホール内に厚手の紙でできた支柱に布のカーテンをかけてつくった1人約1畳半ほどのスペースで生活を余儀なくされているという状況で、またホールに入り切れない人は廊下などにダンボールをつなげてつくった仕切で寝起きをしているというプライバシーのかけらもない状態でしたが、地元ボランティアの方の話では、ピーク時にくらべれば人数が減ってましになってきたほうとの事でした。



避難所生活は路上生活と変わらない状況

物資支援センターでの作業

ビックパレットには避難者の生活スペースとともに、大ホール2つが行政や相談機関の窓口と、物資支援センターにそれぞれなっており、ボランティア作業としては物資支援センターに寄せられる全国各地また海外からの支援物資の運搬・整理や、避難者らへの物資配布の付き添い、また配布された物資を持ち帰る際の手伝いなどを行いました。



物資の運搬・整理については、特に毎日大型トラックで運ばれてくる水がかなりの重労働となりました。というのは、避難者が物資を取りにきている傍らでの運搬作業であり、当然フォークリフトなどはなく、全て手作業・バケツリレーで重いダンボールケースを運ぶことになります。大型トラック3台（水1600ケース）が一日で来たときは、さすがに日々の運動・体力不足を感じずにはられませんでした。

また物資の配布時には、特に高齢者の方が「大きなものや水などの重いものは自分で持って帰れないから」といって遠慮しているのを多く見ました。ですので持ち帰りが大変そうな方については、「持ちかえるのを手伝いますから遠慮しないでください」との声かけをするようにして柔軟な対応を心がけました。



物資を持ち帰るにも、ダンボール1箱満タンでかなりの荷物。水など受け取るとさらに重い。



水を延々と運ぶ。重い！

支援活動で感じたこと

そうやって避難者の方と接する中では、物資を運ぶのを手伝おうにも認知症が出ているのか、どこに自分が帰ればいいのか分からなくなっている方がいたり、杖をつくおじいさんの物資を運ぶのを手伝った際には、ダンボールの仕切られたスペースの中で奥さんが介護ベットで横になっていたりと、日々体力を奪われて弱っている方々がたくさんいる事を痛感しました。ニュース等でも避難生活3ヶ月と聞いて、漠然と「大変だろうな」とは思っていました。が、「大変だろうな」どころではなく、「命」が今もなお危険にさらされている方がたくさんいるという認識に改めざるを得ませんでした。避難されている方の中には当然のことながら高齢者も障がい者も、小さいお子さん連れの方もおり、そういった避難所生活の日常をサポートするボランティアの数が圧倒的に足りていないと感じました。

避難生活の支援については、行政などの範囲ではどうしても限界があり、例えば先の物資の持ち帰り一つとっても「全員」の物資の持ち帰りを手伝うことはできないので、しません」ということになっています。どこかでラインを引くことは仕方のないことですが、だからこそボランティアがそういったライン・制度の隙間を埋めていく必要があります、その意味は大きいと思いました。被災地でのボランティア活動に順番をつけることはできませんが、私自身、ボランティア活動と聞いた時にまっさきに瓦礫の撤去や家屋の片づけなどを思いうかべた身として、避難所での生活を余儀なくされている人達の「命」を守り支える活動に、もっと人が入る必要性を感じました。

ボランティア活動を終えて

ボランティアを終えた最終日には連合福島の景山会長からお礼の挨拶をいただきました。また会長は、今回の被災を受けて「連合福島として、災害時のボランティアの統括を担う社会福祉協議会との組織的な連携・協力スキームが事前に十分構築できていなかったことを反省している」と述べられ、「地元に戻った際には、地方連合・労福協の組織として、社会福祉協議会との関係・連携スキームの構築に向けて取り組んでください」との言葉をいただきました。

私自身も、今回参加させていただき、これだけの人数と期間、またその統率力も含め、連合の組織力を肌で感じる事ができました。災害時に地元で果たすことのできる役割は大きいと思います。その時、何を果たすのか、今の時点で確認しておく必要があると思いました。



仮設住宅への移動も徐々に始まった様子